

草津市立矢倉小学校通信 令和3年7月1日 NO.6



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

迷惑をかけあいながら、くらししていくお互いだからこそ

電動車いすを利用しておられる方のお話を聞かせてもらう集いに参加したときのこと。「私は、堂々と、迷惑をかけながら生きています。」に始まるお話にどんどんひき込まれていった。「堂々と迷惑をかけている」のか、「迷惑をかけながらも堂々と生きている」のか、どうなのだろうかと混乱してしまったものの、やがて「堂々と迷惑をかけあっているお互い」であり、「迷惑をかけあい、とまどいながらも、堂々と生きたいと願っているお互い」のことと受けとめていった。迷惑をかけているかどうかということには、悪意を持って相手をこらしめてやろうという作意がないかぎり、お互いさまのことだという不思議な公平感、平等感があるようだ。

私の場合、幼少の頃は盲目の祖母に文句ひとつ言わずにこにこしながらそばにつきそっていた祖父がいた。祖父はやがて認知症の症状が進行していく。祖父や祖母と共にくらす生活は、はた目では大変だと見られていたかもしれないが、自分にはそれほどものではないという受けとめだった。いつも対等な立場で、本音が言い合えていたからだろう。祖母は、用を足しにろうかを壁伝いに歩くときは、決まって「子どもがおるなら、どいとくれ」と手まり歌風の調子で歌い、「ええか、とおりませ」と唱えていた。ろうかで物を散らかして遊んでいることが多かった私たち兄弟は、いっせいにブルドーザーのようにして通り道をつくった。間に合いそうにないときは、「ちょっと待って」と強い調子でわがままを言うこともできたし、それをこにこしながら待ってくれる祖母であり、祖母のうしろでことのなりゆきを見守る祖父だった。こうしたことは、いっしょにくらすお互いだからこそ認められる、対等な関係である。「これくらいがまんしてよ」「あつごめん、忘れてた」などというように、お互いの思いを言い合って、調整しながらくらししていくのが実際の生き方であり、それができてはじめて認めあい、支えあう生き方ができると言ってもよいだろう。

お話の中で、こんなことも語っておられた。

「点字ブロックは目の見えない人には、いいものだろうけれど、車いすに乗っている自分たちには不便なもの。このように、障害がある者どうしでも、いっしょにくらしていけないと気づかないことがたくさんあるんです。」「タッチパネルも同じです。確かに便利です。けれど、使い慣れていない方たちにとっては、こわくてさわれない代物になっていませんか。」と。

障害のあるなしにかかわらず、誰でも、はじめてのこと、知らないこと、未経験のことについては、不安がつきまとう。「そんなことも知らないの!」「それくらいできないの!」と、バカにされやしないか、責められないかとわが身を守ろうとして、時に攻撃的になってしまうことさえある。そんな弱さを背負っているお互いなのだということに改めて気づかせてもらった。

今年度、矢倉小では次のようなことに力を入れていこうと取り組んでいます。

「これ、わからないから教えてくれない」とサインが出せること。「どうしたの?」と問いかけてみること。「これって、こまるよねえ。自分もそうだったよ。」「いっしょにやろうか」と共感し、誘ってみることの三つです。人と人とのつながりが寸断されてしまいやすいコロナ禍だからこそ、かわりあい方をしっかりと身につけていきたいと願っていることです。ご家庭でも、地域社会でも、この取り組みが広がっていけばいいなあと思っています。

校長 大林道範